

元田作之進と立教学院

—立教中学校との関わりを中心に—

鈴木勇一郎

はじめに

元田作之進は、立教中学校長、初代立教大学長を歴任した上に、日本聖公会最初の日本人監督に就任するなど、立教および日本聖公会の歴史にとつて、極めて重要な位置づけを持つ人物であるはずである。

「はずである」というのは、その割にはこれまで、まともに研究されてきたとは言えないからだ。

寺崎昌男は、元田の生涯について伝記的研究を試みたが、その成果は今のところ前半生の、さらにその初期だけに留まっている⁽¹⁾。元田については顕彰目的の伝記すら存在しないというのが現状である。

明治時代に活躍したキリスト教および、ミッション・

スクールの指導者たち、例えば同志社の新島襄⁽²⁾、青山学院の本多庸一⁽³⁾、明治学院の井深樞之助⁽⁴⁾らが、早い時期に伝記が編まれてきたことからすると、元田の扱いはそうした面でも際立っている。

その要因はいくつもあるだろう。さしあたり考えられることの一つは、新島が学校の「創立者」であり、本多や井深らが、学校のトップを長年務めたのに対し、立教における元田は、中学校長や大学長という、いわば「中間管理職」的な存在であったということだ。元田がいたころの立教では、中学校長や大学長の上に立教学院のトップである総理が存在し、米国聖公会から派遣されていた宣教師がこれを務めていたのである。

また、明治末年に内務省が主導して開催した三教会同

への出席や神社参拝の許容といった、当時の国家体制に対する姿勢は、戦後のキリスト者たちの評価を低くしてきた。

武田清子のキリスト者分類に従えば、元田のような人物は「キリスト教を日本の精神的伝統である神道や仏教に引き寄せて受容し、また積極的に天皇制や国家への忠誠を示そうとする」「埋没型」として⁽⁵⁾、その思想や行動に対する評価は低くなりがちである。元田の天皇観を分析した西原廉太の研究も、こうした系譜に位置づけることができるだろう⁽⁶⁾。

だが現実として、元田は長く立教学院において要職を務め、他の日本人よりも立教学院の教育や運営に深く関わっていたことは確かで、その意味でも元田の果たした役割について、検討を進めていく必要がある。

大江満は、米国聖公会との関係を軸に、立教学院の歴史について研究を進めてきている⁽⁷⁾。立教は、他のミッション・スクールに比べても、母教会の影響力が強く⁽⁸⁾、こうした視点からの研究はとりわけ重要である。しかし同時に、日本の学校として、日本人が深く関わって学校が運営されていたことも確かで、その観点に立てば、元田の果たした役割を抜きにして立教学院の歴史を考えていくことはできない。

また、元田を新島襄、本多庸一、井深梶之助といった、

他のミッション・スクールの日本人指導者と比較することは、ミッションとの関係とは違った次元での立教の特質の把握にもつながる。

本稿では、立教に関わるようになるに至る、元田の前半生を再構成するとともに、最初に関わった立教中学校を中心に、立教学院で果たした役割について検討していく。

一、元田の人物像

元田作之進について検討するにあたって、はじめにその生涯を簡単に振り返っておきたい。

一八六二年に久留米藩士の子として生まれた元田は、幼いうちに両親と死別し、苦学して久留米師範学校を卒業し、小学校長を務めた。その後、大阪に出て米国聖公会の宣教師テイニングが運営していた大阪英和学舎に学び、洗礼を受けた。一八八二年、アメリカへと留学し、フィラデルフィア神学院、ペンシルヴァニア大学、コロンビア大学で学び、一八九六年に帰国している。帰国後は、立教中学校長、立教大学学長を歴任し、一九二三年に日本聖公会東京教区監督に就任した。日本人が聖公会の監督に就任したのは彼が初めてであった。一九二八年、テイニングの追悼礼拝に向かう途中に発病し、大阪で客死している。

この経歴からも明らかなように、少なくとも日本聖公会や立教学院にとつては、極めて重要な人物である。

だが、死後比較的早い段階で伝記が書かれた新島、本多などとは異なり、元田のまとまった伝記は今日に至るまで編纂されていない。

元田の跡をついで立教大学学長となった杉浦貞二郎が、元田は「実に淋しい生涯を送った⁽⁹⁾」と述べているが、没後、誰も伝記を編もうと思わないほど、人望がなかったのだろうか。

そこで、とりあえず元田に対する同時代の人々の評価を見てみよう。

まず元田の秘書だった高瀬恒徳は、周囲の人物から

「あれはケチな男だよ。梅干を入れたお握りを二つ竹の皮に包んで毎日お弁当に持つてくる。」
とか、

「何でもお座なりの妥協屋で、瓢箪鯨で、まったくむじなと云う仇名の通りだ」

さらには、

「世俗的で、熱がなくて、深みがない」⁽¹⁰⁾

といった評判を聞いていたという。この通りだとすると、金銭に吝い上に高邁な思想などいささかも持ち合わせていない、救いがたい俗物という人物像が浮かび上がってくる。

もっとも、毎日梅干入りのお握りばかり食べていたことについては、元田の長女である松下ミツが「なんとケチな人だと評判になったらしいようですが、それが好きだったので仕方がありません⁽¹¹⁾」と回想しているように、単に食の嗜好の問題だったようだ。

一方、秘書として、日常的に接していた高瀬自身は、次のように元田を評している。

「先生には儀式主義の人たちのように派手な芝居がかった礼拝を司つたり、福音主義の人たちのように扇情的な雄弁はなかった。しかし、福音を人々の知性に訴えて説きすすめて行く情熱、形式に捉われない、心の底の隠れた敬虔の深さを私は見て取った。⁽¹²⁾」

「どこまでも辺幅を飾らない、術はない、自分は尊い人間だぞと云つたやうな処の爪の垢ほどもない⁽¹³⁾」
高瀬の言からは、元田は仰々しい儀式や、理論よりも感情に訴えることを好まず、虚勢を張つたりしない率直な人物像が浮かび上がってくる。

もちろん、これだけでは親密だった人物による偏った評価と見ることもできるので、同時代の第三者的な評判も見ておこう。

立憲政友会系の新聞『人民』は、国内外で活躍する著名な人物を批評するコラム「新人物」を連載していたが、一九〇二年二月九日号では元田を取り上げている。

「容貌極めて温和人に接して城府を設けず極めて真面目なるも亦世の所謂究屈なる牧師にあらず」⁽¹⁴⁾

この記事は、元田が生真面目さと同時に、寛容さと実理性を持ち合わせた人物として描いている。

大衆向け日刊紙『万朝報』でも、「フースヒー」という人物評コラムを連載していたが、そこでも元田は

「人を魅するやうな魔力はなく、温顔滋容を以て帰依せしむる如き風ではないが、偽らず、飾らざる間に天真が流霞して尊嚴の心が湧く」⁽¹⁵⁾

と評されており、やはり、飾り立てない率直な人柄と認識されていたことがわかる。

こうした元田に対する人物評は、新聞記者のような第三者だけでなく、彼に日常的に接した人々にも共通している。聖公会の聖職者若月麻須美は、元田の死後、次のように回想している。

先生は芳烈な酒の様な人ではなく、淡々たる真水の様な人であって、従って何等之れといふ印象を与へる人ではない。(略)若し強いて元田先生に就ての印象を求むれば、先生は実に少しも気取らない、平民的の人であったといふ事である。又極めて常識の発達した人で、余りに常識の発達し過ぎられざるや、とさへ思はれた程の人であった。其説教は感じましたといふ人が無く、能く判りましたといふ種類

のものであった。⁽¹⁶⁾

同時代の人々の評価からは、理論を振りかざすのではなく、極めて实际的で処世術に富むと同時に、現実と格闘しつつ筋を通そうとする、元田の人物像が浮かび上がってくる。

このような論理的かつ平易明快な元田の性格は、松下ミツの回想からも明らかだ。

「倫理哲学の講義は全部キチンと分類されていましたので、学生は覚えやすいとよるこんでいました。教会の説教もややその匂いがありました。」⁽¹⁷⁾

彼の性格は講義や説教にも反映し、わかりやすいと周囲の評価を高めたようだ。しかしその反面、衛学的な装飾がない分、「深みがない」などと、揶揄されることにもつながったかもしれない。いずれにせよ「稀に見るの実徳教育者⁽¹⁸⁾」というのが、元田に対する最大公約数的な評価であったことはまちがいないだろう。

このような、論理性と現実性のバランスのとれた元田の特徴は、教会と現実社会との関係においても大きな影響を及ぼしている。

一九二八年四月二十三日に行なわれた元田の葬儀には、教会の枠を超えたさまざまな分野の人々が参列している。⁽¹⁹⁾ 例えば、当時枢密院議長を務めていた倉富勇三郎は、元田と同じ久留米の出身であり、ともに旧藩主有馬伯爵家

の相談役となるなど、深い関係を持っていた²⁰⁾。こうした現実社会との密接な関係は、新島襄や本多庸一といった同時代のキリスト教指導者とも共通する特徴だった。

米国聖公会の宣教師たちも、元田を単にキリスト教会の指導者としてだけでなく、政界・官界とも深いかわりを持つことのできる人物と認識していた²¹⁾。

もちろん、こうした元田の性質は「学校経営の才能は権門に取入ることの手腕によって非凡の価値をもつて居る²²⁾」という類の「俗物」としての評価にもつながり勝ちだったことは、否定できない。

とはいえ、宣教師たちと評価のベクトルは大きく違うが、政界・官界と深い関係を持っていたという認識では一致しており、元田の処世術に長けた一面を表している。ただし、こうした一見「俗物」とも見える「清濁併せ呑む」性格が、日本社会と聖公会との橋渡しのキーパーソンの役割を果たす上では、重要な要素であった。だがそれは、元田がひたすら現実流されていく人物だったことを意味しない。根底に、理想に基いた極めて強固な信念があったことも見逃すことはできない。

それを示す一例として次のようなエピソードがある。泉州堺の修養会に、講師として臨席された折、座敷の真ん中のストーヴに先生があたっているの、他

の教役者連中もその傍へ寄って行ったが、近づいてみると、肝心の火が何もない。

時に先生、啞然たる教役者を顧みて曰く
『教会また斯の如し』と。²³⁾

この行動によって元田が伝えようとしたメッセージの解釈は、いくつもあるだろう。しかし、それが当時の教会の現実への強烈な批判であったことは明らかであり、時に周囲の空気を読まないほどのパフォーマンスによって表す行動力を持っていたことを、このエピソードは伝えている。

二、聖職者としての元田

元田は、大阪英和学舎時代の一八八二年二月に、宣教師であったティングから受洗している。彼はその後聖公会の聖職者となり、遂には日本人最初の監督となるが、この時点では一信徒であった。キリスト教信者となることと、聖職者となることの間には距離があり、さらに飛び越えなければならぬ一線があったはずだ。

そもそも、元田が大阪に出てティングのもとで学ぶようになったのは、別に聖公会の聖職者になるためではない。アメリカに留学するのも学問を身につけ、ひとかどの人物になりたかったからだ。

心境が大きく変化したのは、留学前テイニングと一緒に紀の川流域で伝道に当たっていた時だった。その時のことを、元田は次のように回想している。

明治十八年の五月、直に米国通ひの船に乗るべく大阪に來りしが、チング氏に抑へられ、米国の友人に手紙を送り、彼地に於て充分の便宜を図るべきにつき、其返書の來るまで、共に和歌山に行き、自分と共に伝道せよ、其場合には予も同船すべしとの事であつた。予は其厚意を受け、和歌山を根拠として紀の川沿岸に伝道することとなつた、此間予の心理状態に一變化を來たし、將來教役者たらんことの決心を起こしたるは此時であつた、初め洋行を思ひ立ちしは単に學問の爲めであつたが、此時主として神學研究と云ふことに思ひ替へた²⁴⁾

元田は、紀の川流域への伝道の中で、聖職者として生きていくことを決意し、渡米後に神學を學ぶことを望むようになった。実はテイニングは、元田が大英和學舎に在籍していたころから、その優秀さに目をつけ、聖職者になることを期待していたので²⁵⁾、まふまふテイニングの術中にはまり込んだという見方もできるかもしれない。

元田が、ハイチャーチ的な立場に立つマキムなどではローチャーチ的な傾向を持つテイニングから受洗したこと

は、その後の歩みにも大きな影響を及ぼした。

アメリカに渡つてフィラデルフィア神學院、ペンシルバニア大學で學び、コロンビア大學で哲學博士の學位を得た元田は、日本への歸國後、キリスト教の青年活動であるキリスト教青年會(YMCA)活動に深く関与している。

一九〇一年、ボストンで開催されたキリスト教青年會大會に日本代表として出席したほか、機関誌『開拓者』に活発に寄稿している。さらには東京に建設された日本YMCA同盟會館の建築委員長を務めるなど²⁶⁾、その活動に積極的に関わっていた。

YMCAは、特定の教派に属するものではなく、プロテスタント全体による運動である。それだけに、超教派的なエキュメニカニズムに親和的であつた。

また、元田はアメリカから歸國後の一八九七年七月には、プロテスタント系の超教派組織である福音同盟會で演説しているが、この際に各派から合計十名が選ばれた全国巡回伝道の担当者の一となるなど²⁷⁾、超教派での活動が目立つ。

こうした活動を通じて、元田は次第に聖公會だけでなく、日本のプロテスタント教界の中の活動が目立つようになっていく。

一九一二年に日本メソヂスト教會監督で、青山學院長

も務めた本多庸一が死去した際、元田は押川方義（日本基督教會）、原田助（日本組合基督教會）、江原素六（日本メソヂスト教會）らと並んで柩に付き添うなど²⁸、日本聖公會を代表する日本人として認知されるようになっていった。

三、教育者としての元田

アメリカから帰国した元田は、一八九六年九月、東京の立教尋常中学校の教員兼チャブレンに就任している²⁹。元田が立教に赴任することになった経緯はよくわからないが、当時の校長テイニングと学監左乙女豊秋は、元田がアメリカ留学前にいた大阪英和学舎時代の教師でもあり、彼は「両先生の許にて働き得る様になったことを大に喜んだ³⁰」という。

宣教師たちは当初、元田がコロンビア大学で社会学を専攻したこともあって、その方面の教育を担うことを主に期待していたようだ³¹。しかし、学生たちは彼に学校における宗教指導者、つまりチャブレンとしての役割の方に大きな期待を寄せた。立教で宗教活動の責任者をチャブレンと呼ぶようになったのも、この時からだったとされているので³²、元田に対するこの方面への期待のほどを知ることができる。

実は、元田がやってくる以前の立教の、宗教的な雰囲気は極めて薄いものだった。

当時、立教のカリキュラムには、キリスト教や聖書を教える科目は存在せず³³、授業以外でも「宗教的会合に出席するものの数も少く、又其感化力も極めて微々たる³⁴」状況に陥っていた。

これに対して、在学生の中にも事態を打開しようという人々が現れるようになった。特に一八九六年一月、ジョン・R・モットが来日すると、学内における宗教復興運動が盛んとなった³⁵。

モットは、世界的に知られたYMCA運動の推進者であり、エキュメニカル運動の立役者でもあった。モットが日本を訪れたのは、この時が初めてだったが、その後も彼が来日するたびに、日本のプロテスタント系キリスト教界では、エキュメニカル運動や基督教大学設立運動など、さまざまな動きが活発化している³⁶。

この時モットは立教も訪れているが、これを契機として一部の在学生が「十字同盟」を組織した。十字同盟の学生たちは、寄宿舎での伝道を展開³⁷するとともに、「従来の消極的なる修養会を改造して、新に基督教青年会を組織」するなど、宗教復興運動が盛んとなっていた³⁸。立教では、すでに一八八〇年代にYMCAが組織されていたが³⁹、それまでの活動は活発とは言えなかったよう

だ。

その中で、立教にやってきたのが元田だった。彼が着任すると「恰も火に油を注いだ様に宗教的気運は高潮に達⁽⁴⁴⁾」したという。

学生たちによる宗教運動の盛り上がりを見た元田は、これを利用して立教におけるキリスト教活動を復興せるとともに、「聖公会流の軌道に載せて指導すべき必要を察した⁽⁴⁵⁾」のである。

こうした状況を踏まえて元田は、一八九七年春に「立教学校ミッション」を設立している。「主と其の教会に対する奉仕」を目指したこのミッションは、全学生を対象とした基督教青年会とは異なり、聖公会信徒の学生の中から特に信仰、品性、学力に秀でた人物を選抜して結成したものである⁽⁴⁶⁾。ミッション員として選拔され、元田の知遇を得ることは、在校生にとって「非常な光栄」に感じられたという。選ばれた学生たちは、学校内だけではなく、一般社会に対する伝道に積極的に関わっていった⁽⁴⁷⁾。

元田の活動に対して、テイニングに代わって立教学院総理に就任したアーサー・ロイドも、次のように報告している。

「元田博士は大変に尽力しました（当校の活動の宗教の部分について触れる際には、彼についてさらに多くを

語らなければなりません）」⁽⁴⁸⁾。

実際、立教における元田は、大会堂での礼拝の司式、宗教的集会、基督教青年会活動のほか⁽⁴⁹⁾、週に二回、放課後に聖書研究会を主催⁽⁵⁰⁾するなど、特に宗教活動の面で、大きな役割を果たすようになった。立教学校ミッション結成一年後の一八九八年三月には、その機関誌として『築地の園』を創刊している。

こうした活動状況を反映したのか、当初チャプレン兼教員として着任した元田は、翌年からは、チャプレンとしての務めに専念するようになった。とはいえ、社会学など専修科の一部の授業は依然として担当していたようだ。専任チャプレンとなった元田は、築地の立教学校と、神田の英語専修学校を往復する多忙な日々を送るようになっていく⁽⁵¹⁾。

一八九八年一月、立教学院総理ロイドは、寄宿舎におけるキリスト教活動の重視を打ち出すなど、立教における宗教活動のてこ入れに着手していた⁽⁵²⁾。元田の一連の活動は、こうした潮流にうまく乗るものだった。

また、聖公会における活動としては、一九〇〇年六月に『基督教週報』を創刊したことが特筆できる。それまで聖公会系の雑誌としては、月刊誌である『教界評論』や『日曜叢誌』はあったが、週刊の雑誌は存在していなかった。この年の一月に『教界評論』が政府から発行停

止処分を受けたこともあり⁴⁹⁾、元田の主唱で初の週刊誌『基督教週報』を創刊したのである⁵⁰⁾。主筆は元田自身が務めたが、雑誌名に「聖公会」の文字を入れなかったのは「読者の範囲を単に聖公会内に限らず、他にも及ぼさん⁵¹⁾」という考えがあったという。

このことから、聖公会としての伝道を重視しつつも、同時に他の教派との関係をなおざりにしないというのが、元田の立場であったことがわかる。

四、立教中学校の誕生と校長就任

元田が立教に赴任した時期に、立教学校校長を務めていたのはティングである。彼は、「人力車に打ち乗り、教職員の家々を訪問し、座敷に通って、暫く世間話など試み⁵²⁾」るなど、日本人社会に深く入り込んでいこうとする姿勢が強かった。その反面、母教会から見れば、現地に籠絡されてしまったとも見られがちであったかもしれない。

実際ティングが、学監として大阪から招聘した左乙女豊秋は、一八九〇年以來、立教学校の「学政改革」を進めた。その中でアメリカのカレッジ教育直輸入のカリキュラムから、日本の教育システムへの対応が進んだが、一方では学内でのキリスト教教育は後退したとされてき

た⁵³⁾。

ミッションから見ると、左乙女学監時代は、「年々巨額の貨幣(当時のミッションの会計としては)を消費し」ている割には、「成績は一向拳がらず、生徒は依然として五十名だに満たず、教員の多数は異教徒にあらざれば、懷疑論者なり、学校内部の伝道は不振を極めて」いるという状況だったのである⁵⁴⁾。

しかしそれでも、ティング校長自身が「ミッション・スクールでなければ、青年たちはほぼまちがいなく、自身の教会の活動や聖職から遠ざかるでしょう。日本における教会が、聖餐台や、人々の指導者となるような教養ある一般信徒を持つつもりなら、立教の事業は絶対に必要です⁵⁵⁾」と、母教会に対し報告しているように、彼も基本的には立教学校を伝道的手段として位置づけていた。

この時期、立教だけではなく各ミッション・スクールは、志願者の大幅な減少に悩まされるようになっていた。特に、一八九四年の高等学校令は、尋常中学校以外から上級学校への進学を事実上閉ざした。ミッション・スクールのような非認可学校の不利は、明らかなものとなりつつあったのである。

こうした状況に対応して、各ミッション・スクールでも中学校令に対応した尋常中学校としての認可を受ける

ことで、上級学校への進学資格を得る、つまり日本の学校教育制度に合わせた形で再編を図っていた。

尋常中学校として認可を受けるといことは、小学校から大学につながる日本の教育システムの一環に組み込まれていくことを意味した。

だが問題は、当時の政府が公教育での宗教と教育の分離を強く求めるようになっていたことである⁵⁶。ミッション・スクールは、基本的に伝道のための手段として始まっており、その性格はこの時期にも色濃く持っていた。こうしてミッション・スクールは、直接的に公教育との対峙を余儀なくされるようになった。つまり、自らの行なうキリスト教教育の意味を再定義することを迫られたのである。

例えば、メソヂスト監督教会のミッション・スクールである東京英和学校（後の青山学院）の松島剛は、東京・横浜のミッション・スクールの教育者に呼びかけて雑誌『同志教育』を発行し、こうした状況へ対応するための、議論を展開した⁵⁷。

そこで松島は「日本教育制度は固有の歴史と人情に鑑み特殊ならざるべからず、濫に外国の制を模するは不可なり」として⁵⁸、日本の国情に合わせた形でキリスト教教育を行っていくことの重要性を強調している。

また本多庸一（東京英和学校校長）も、日本ではミッ

ション・スクールにおいても非キリスト者が多数を占めており、キリスト教教育も、いきなり聖書に基いた抽象的な物語をしていても効果が上がらないことを指摘する。むしろキリストの伝記といった具体的な話や、日本の道徳や故事に引きつけながら次第に教義に入っていくしかないと考えていたのである⁵⁹。こうした本多の具体的なキリスト教教育論は、彼が実際に学校でキリスト教教育を実践していく中で、会得していったものであった。

この雑誌では、他にも井深梶之助（明治学院総理）とあった、ミッション・スクールの代表者たちが、「基督教主義」の学校のあるべき姿について論じているが、一八九三年にウイリアムズの後任として米国聖公会日本伝道監督に就任したジョン・マキムも「基督教主義の教育」と題した一文を寄せ、ミッション・スクールでの教育のあり方について持論を展開し、「吾人の勉むる所の教育は基督教主義の教育なり」として、次のように主張する。

「吾人は更に神意を体して靈魂の発達を図り、此等全幅を益々発達せしめて、之に加ふるに一層の価値、美、栄光、権力、及び不朽不滅を以てし、以て人といふもの（人全幅）を円満に教養薰育せんことを期するのみ⁶⁰」
ここでマキムが強調するのは、知育、体育に偏らない徳育としてのキリスト教だが、本多や後に触れる井深と異

なり、抽象的な議論に止まるといふ印象は拭えない。この時点でのマキムは、米国聖公会の日本における代表者ではあつても、教育の実践者ではなかつたことが影響しているのかもしれない。

いずれにせよ、各ミッション・スクールが、日本の教育システムとの対峙を迫られる中で、キリスト教学校の存立意義自体をめぐる議論が活発化したことは確かだろう。

五、立教尋常中学校の誕生と認可問題

一八九六年四月に立教学校は、それまでの専修学部と高等普通学部という体制を、専修学校と尋常中学校に再編成した。この際に、それまで学監であつた左乙女は、立教中学校長に就任している⁶⁰。

すでに、数度に渉る学政改革を経て、次第に日本の学校教育システムに適合するような改編が図られてきたが、これはその完成型ともいえる。

元田が執筆した『立教学院歴史』では、学政改革による改編の事実関係を淡々と記すのみで、その要因など詳しい事情には触れていない。学政改革の時点では元田はまだ立教には赴任していなかつたのである。

一方、『立教学院小史』を著した貫民之介は、尋常中

学校と専修学校への改編の際に「従来の教育方針を軽視したるものには非ず」、「生徒を多く得て以て感化を廣きに及ぼす」といつた説明がなされたことを記している。立教でも、学校の目的とキリスト教教育の關係について議論があり、できるだけ多くの生徒を集めることで、その目的の達成を図るとの意図があつたことがわかる。

元田が立教に赴任したのは、この直後の九月のことである。

実は、この際には「尋常中学校」と名乗りつつも、政府の認可は受けていない。認可を得ることなく、立教尋常中学校を名乗ることができた理由はよくわからないが、当時はまだ、居留地内に立地し、直接政府の統制が及ばなかつたから、とも考えることもできる。だが、一八九九年七月には、改正条約の発効が迫つており、居留地廃止後は、他の学校と同様に政府の認可を得る必要があることは、明らかだつた。

そこで、条約発効を半年後に控えた一八九九年一月、立教尋常中学校は、政府へ認可申請を行った。ところが、すんなりとは認可を得ることはできず、結局、代議士であつた島田三郎らの奔走によつてようやく認可を得たとされている⁶³。島田は、当時キリスト教信者としても知られていた⁶⁴。

文部省による審査に際して、聖公会や立教関係者が特に懸念していたのは、認可によって校内でのキリスト教教育が制限されるということだった。マキムはアルフレッド・バック米国公使を通じて認可の条件を文部省に問い合わせ、菊地大麓文部次官から次のような回答を得ている。

「今回の認可は課業時間に於て宗教を語らざるものとして与へたり、然れども文部省は課業外に宗教的教訓を施すに干渉するものに非ず」

文部省が、正課外では校内での宗教教育を認めるのであれば、中学校の認可を得ても「尚充分に宗教的運動の余裕」を持つことができると立教側では判断した。たとえ正課内でキリスト教教育を行なえないとしても、認可をうけることで生徒数を増やした方がキリスト教を広める上では役立つと考えていたのである。

その理由を『築地の園』に掲載された「立教尋常中学校の認可と校内宗教的生命」という論説は、次のように説明している。

「在学生の少数なりしは常に当局者の遺憾とせし所、而して「認可」の二字は、多くの新来学生を得たる又得んとする好饗たり、吾基督教的感化を与へんとす」つまり、認可を得ることで多少制限が加わったとしても、できるだけ多くの生徒を集めた方が、結果としてキリス

ト教的感化を広めることができる、という考え方である。当時の立教の首脳は「認可は唯之れ一の手段たるに過ぎずして、目的の他に存するを忘るへからず」、つまり認可を得ることは、あくまでもキリスト教を広めていく上での手段のひとつに過ぎないと考えていたのである。この論説自体は無記名だが、少なくとも主筆である元田の意向を反映したものだということには確かだろう。

政府による認可を受けて、四月一五日に日本聖公会北部地方会は、この問題について討議している。最終的には「立教学校設立の主旨に反するもの」ではないという判断を示したが、結論を出すまで二時間にわたって激論が戦わされた。

やはり、母教会はキリスト教教育の制限が、学校の性格にどのような影響を及ぼすのか、強い懸念を持っていたのである。だが、次に見る他のミッション・スクールとは異なり、立教ではこれ以前から正課外でキリスト教教育を行っていたので、実態からすると、大きな影響はなかったとも考えられる。

尋常中学校認可に伴って、学校内におけるキリスト教教育が制限されることについては、他教派のミッションスクールでも大きな問題となっていた。

従来、キリスト教教育をめぐるっては、後に触れる文部省訓令十二号問題に注目が集まってきたが、実は尋常中

学校認可の際にも、文部省はミッション・スクールに正課内での宗教教育の実施を制限していた⁽⁷¹⁾。

青山学院では、一八九六年二月に尋常中学校としての認可を受けている。中学校設置の目的にキリスト教教育に関する文言はなく、正課内ではキリスト教に関する教育を行わないことになった⁽⁷²⁾。

続いて同志社も四月に認可を受けているが、その際にも倫理の授業に際して、聖書を使用しないことを京都府庁に対して誓約している⁽⁷³⁾。

すでに正課内でのキリスト教教育を行っていないなかった立教とは異なり、青山学院ではそれまで倫理や修身の授業内でキリスト教について教授していたので⁽⁷⁴⁾、これは学校の性格の大きな変更であった。だがこれについて、母教会であるメソヂスト監督教会が、特に問題とした形跡は確認できない。

しかし、横浜バンド以来の本多の盟友であった明治学院総理事井深梶之助は、「倫理上、宗教上、我々が信ずる所の基督主義を飽くまで貫くことが出来ませぬものならば、夫丈の金を費やし能力を用ひる必要はない」と断言して、同志社や青山学院など、認可を受けつつある学校の態度を批判した⁽⁷⁵⁾。

こうした批判に対して青山学院院長本多庸一は、中学校の生徒は「社会の柱石となるべき者」であり、課程外

でもキリスト教の感化を及ぼすことは、教会の機関としての学校の義務を果たすことになるなどと反論した⁽⁷⁶⁾。多少制限があったとしても、できるだけ多くの青少年にキリスト教の感化を及ぼすことが、ミッション・スクールとしての設置目的にも適うものだというのが、本多の考えであった。

厳格にキリスト教教育を守るか、それとも、制限があったとしてもできるだけ多くの生徒にキリスト教の感化を与えた方が、むしろ学校の目的に適っているとするのは、なかなか難しい問題だが、この時点ではできるだけ広くキリスト教の感化を及ぼすことを選択したといえよう。

また、青山学院や同志社の姿勢を批判していた井深の明治学院も、正課内においてキリスト教教育を行わないことを誓約することで、一八九八年四月に尋常中学校としての認可を受け⁽⁷⁷⁾、結局、他の学校と同じ選択をした。こうして、正課内でキリスト教教育を行わないことで、文部省から中学校としての認可を受けることが、主要なミッション・スクールで定着していったかのように見える。

六、文部省訓令十二号問題と元田の立教尋常 中学校校長就任

ところが、事態はこれで安定したわけではなかった。一八九九年八月三日、文部大臣は訓令第十二号を発した。これは政府の認可学校において宗教教育を事実上禁止するものだった。中学校の認可を受ける際には、正規の課程外で宗教教育は可能だったが、今回は正課外でもこれを禁じていた。

もちろん、宗教教育の禁止はキリスト教だけでなく、他の宗教にも適用されるものだったが、実質的にはキリスト教学校が強く影響を受けるものであった。当時、仏教系の学校のほとんどは、僧侶養成を目的としたものであり、一般の青少年を広く集めるという性格のものではなかったからである。

この訓令十二号問題が起った一八九九年八月、それまで立教中学校長だった左乙女豊秋が辞職し、代わって中学校長となったのが元田であった。時期からすると、左乙女の辞職が訓令問題と何らかの関係があると考えるのが自然だが、これに関し各史料は沈黙しており、現在のところその理由ははっきりしない⁽⁷⁹⁾。

だが結果として、校長の左乙女から元田への交代は、緊張関係に置かれがちであった立教と母教会との関係を、

大きく変化させたことは確かだ。ロイド総理は、元田校長就任後の状況を次のように報告している。

「着任してまもなくのあいだに、元田博士は見事に、日本人と外国人両方の教員かと共感を勝ち取ることに成功しました。⁽⁸⁰⁾」

しばしばミッシヨンと衝突した左乙女校長時代とは異なり、元田が校長になってからは、ミッシヨンとの関係が融和されていったことがわかる。

いずれにせよ、訓令十二号問題に対して、立教の日本人関係者で直接この問題に対処することになったのが元田だった。

実は、訓令十二号が発せられた際、明治学院総理の井深梶之助や青山学院院长の本多庸一らは、政府の姿勢は、改正条約の発効をめぐる政治状況から来た一時的なもので、それほど深刻なものではないと判断していた。だが、明治学院の母教会米国長老教会や、青山学院の母教会米国メソジスト監督教会の宣教師たちは、キリスト教教育ができないのであれば、教会が学校を設立した意味もなくなるとして、中学校の認可を返上してでもキリスト教教育を維持すべきであると、強い態度を示した⁽⁸⁰⁾。

これを受けて、八月十六日に青山学院、東洋英和学校（麻布中学校）、同志社、立教中学校、明治学院、名古屋英和学校の六校の代表者が集まり、「文部省の訓令に関

する開書」(以下「開書」と略す。)を公にした⁸⁰⁾。各校は、文部省による訓令を、信教の自由を謳った憲法の精神に反しているとし、キリスト教主義の堅持を申し合わせたのである。

だが、元田をはじめとする立教側は、「開書」に全面的に賛成していたわけではなかった。

訓令問題がとりあえず収束した一九〇一年一月八日、元田は東京北部宣教師総会で「日本に於ける認可中学校に関する意見書」を発表し、その間の経緯について述べている。

「開書」の作成にあたって、元田は書記を務めているが、彼自身はこの声明が「政府の認可を維持することは基督教主義に衝突することを断定」するものだとし、反対の意見を持っていた。つまり、中学校の認可を維持したままでも、キリスト教主義を維持することは可能と考えていたのである。

元田は、次のように認可の継続の重要性を主張している。

「政府の認可は仮令ひ其学科課程より宗教教育を取り去ることを命ずるとは云へ、充分に個人的教育個人的感化を与ふる機会を許す以上は、生徒の増加と共に学校に於ける宗教の感化も大ならざるを得ず⁸¹⁾」

元田は、キリスト教を広めるためには、多少妥協を余儀

なくされても、できるだけ多くの人々に学校の門戸を開いておくことが肝要と考えていたのである。この問題はここで初めて顕在化したわけではなく、すでに見たように、尋常中学校認可の時から問題となっており、その立場は、本多のような他のミッシン・スクールの指導者も、基本的に共有していた。

「開書」を発表した三日後の八月十九日、元田と立教学院総理ロイド、米国聖公会日本伝道監督マキムは、東京府庁を訪れ、学校内においてはキリスト教教育を止め、寄宿舎で宗教行事を行なうことで、中学校としての認可を継続することが可能なことを確認した⁸²⁾。

この方針に基づいて、立教では、寄宿舎なども包含する形で立教学院と称するとともに、立教中学校としての認可を維持したのである。

だが、他の多くのミッシン・スクールは、立教とは異なる選択をした。明治学院、青山学院、同志社などは、学校内においてキリスト教教育を続ける代わりに、尋常中学校の認可は返上し、再び各種学校となることを甘受するという立場をとった。

校内でのキリスト教教育を放棄する代わりに、認可を維持するという姿勢は、六校共同の「開書」の方針から逸脱するものとして、後々まで他のミッシン・スクールから非難を浴びた⁸³⁾。

立教が認可を維持する過程で、元田がマキムやロイドとの関係の中で、どのような役割を果たしたか、詳細はよくわからない。

最終的には、ロイドやマキムが判断したことは確かである⁸⁵⁾。しかし、ここに至るには、日本の官庁などと微妙な駆け引きが必要であり、立教が選択した立場は、元田がそれ以前から採っていた態度と矛盾するものではないことから、元田の意向も大きく影響したことは確かだろう。実はすでに見た通り、こうした考え方は元田が特異だったわけではなく、青山学院の本多や明治学院の井深ともある程度共通するものであった。

訓令十二号問題では、宣教師の意向が大きく働いたこともあって、他のミッション・スクールは、認可の返上に傾いたが、基本的には日本人キリスト者たちは、できるだけ広く門戸を開いておくことこそが、結果としてキリスト教の普及につながると考えていたのである。

他校では、ミッションの強硬な意向が働いたのに対し、聖公会が柔軟な対応をとった背景には、母教会ミッションとの関係があった。すでに見たように、前任者の左乙女に比べて、元田がミッションとの信頼関係を深めていたことが、大きく影響していたことは想像に難くない。

七、訓令問題後の立教学院における元田の役割

中学校としての認可を維持したこともあり、志願者が増加するなど、訓令十二号問題後の立教中学校の経営は、比較的順調だった⁸⁶⁾。

こうした中、元田は校長として、それまで以上に立教中学校にキリスト教的雰囲気を高めることに努めるようになった⁸⁷⁾。

特に重視したのが寄宿舎だった。訓令問題を契機としてキリスト教教育を行う主要な場となっていたからである。舎監の上に舎長を置き、元田自らが兼任して寄宿舎内での伝道への関与を強めるとともに、寮生の宗教的行事参加を義務化した⁸⁸⁾。

さらに校旗を制定するほか、『立教学院歴史』を自ら執筆して学校の来歴を語るとともに、訓令十二号問題への対処の正当性を主張するなど⁸⁹⁾、学校の求心力を高めることに努めた。

元田は、その生涯で数多くの著書や辞典の編纂などを手がけているが、ロイドと共同で著した『中等英文和訳』、『New English Readers』、『小学英語読本』といった英語教材的な文献は、一九〇二から三年にかけて集中的に刊行されており、この時期、英語の教育にかなり力を注いでいたことがわかる。

このように、訓令十二号問題後、元田は、立教中学校の校長として目立った業績を上げていたことは確かだ。だが、こうした努力にもかかわらず、「築地時代の立教中学校の宗教運動は、必ずしも成功とは言えな」かった⁹⁰とも言われる。

その大きな要因の一つは、元田が立教中学校長の職に専念できたわけではないということである。

特に一九〇〇年六月に、自らの主唱で『基督教週報』を創刊したことは大きかったと想像できる。先にも触れたように同誌は、聖公会系の雑誌として初めての週刊雑誌だったが、創刊後主筆となった元田は、編集だけでなく、数々の論稿を執筆するなど、非常な力をこの雑誌に注いでいた。

その一方、従来は頻繁に寄稿していた立教学院ミッションの機関誌『築地の園』への記事は、ほとんど掲載されなくなっている。また同誌上で、元田の動静が伝えられることも少なくなった。依然として元田の名前で編集発行していたが、距離を置くようになったことは明らかだ。

さらに一九〇三年には、台湾協会学校の幹事にも就任している。立教中学校校長は、一応引き続いて努めてはいたが、立教にだけ力を注ぐことはなくなつた。元田が立教と距離を置くようになったのは、彼がミッションへ

の不满を募らせたことが原因だったとされる。大江満によると、このころ元田は、米国聖公会の日本ミッション全般の教育方針に対して不满を抱くようになっていたという⁹¹。不满の具体的な内容は、現在のところよくわからないが、比較的円満だった元田とミッションとの関係が、必ずしもしっくりいかなくなっていたことは確かだろう。またこのことは、ミッションからの信頼の厚い元田ですら、ミッションとの緊張関係が高まることもあったことを示している。

台湾協会学校幹事就任に伴って、元田は築地にある校長館から転居し、代わって教頭であった久保田富次郎が入居することになった⁹²。元田は、訓令十二号問題以降、築地に住み込んで、寄宿舎の舎長を兼ねることで、生徒たちに対する濃密な訓育を行なってきたが、そうした姿勢は大きく変わらざるを得なくなつた。

校長として、立教中学校に専ら関わるということができなくなつた元田は、教頭に校内での業務の多くを委ねるようになった⁹³。

元田は、一九〇五年に台湾協会幹事を辞任し、一九〇七年に立教大学校長になつているので、遅くともそのころまでにいったん悪化したミッションとの関係は、一応修復されたようだ。

だが、元田の立教中学校に対する関わりは、元に戻る

ことはなかった。久保田富次郎は、一九〇七年に教頭を辞任するが⁹⁴⁾、その後も久保田の跡を継いだ教務主任本莊季彦が、事実上中学校の校務を取り仕切るようになっていた⁹⁵⁾。本莊は、このころの元田の関わり方について、次のように回想している。

先生は教育家たると共に宗教家である、声明の高まるとつれ、人の期待する所も多くなり、何々協会とか、何々委員とか、さまざま名称を以て種々な事業にたづさはられ、真に孔席暖まらず墨突くるまるを得ずという慨があった。時としては台湾にゆき、時としては支那にゆき、時としては印度にゆき、時としては米国にゆき、時としては欧州にゆかれた。その留守をあづかる女房役も決して容易ではなかった。⁹⁶⁾

元田は、さまざまな校外での仕事に忙殺され、以前のように立教中学校の教育に力を注ぐことが困難になっていったのである。

さらに元田は、一九〇七年に新設された立教大学の校長も兼ねるようになった。本稿では、立教大学と元田との関わりについて、詳しく取り上げる余裕はないが、この時期、築地の立教中学校の一部を間借りしていた立教大学を、独立したキャンパスに移転して、本格的な大学に発展させるということが、大きな課題となっており、

元田はその中心的な役割を担うことが期待されていた⁹⁷⁾。このころ、立教中学生だった前島潔（一九〇六年入学）は、当時の元田について次のように回想している。

「私には中学校時代元田先生に教へて戴いた記憶がはつきり残っていない。修身を御受持になった事と思ふが、僕等の組が果して教へて戴いたのかどうか頗る薄ぼんやりして居る。⁹⁸⁾」

さらに花房正雄（一九〇七年入学）も「中学校の五年間は、ただ一週に一度修身の時間に―それも先生が旅行されたり何かで欠ける事が多かった⁹⁹⁾」と述べている。

こうした回想から明らかのように、中学校に在学する生徒にとつて、元田の直接の薫陶を受ける機会は、少なくなっていたのである。

結局、一九二〇年に元田は立教中学校長を辞職し、立教大学の専任学長となった。元田自身は、中学校を離れることを決して望んではいなかったようだが¹⁰⁰⁾、大学が池袋に移転して、築地の中学校と空間的に分離した上に、当時、立教大学の大学令による認可が具体化しつつあったことなどを考えると、立教中学校長の職から離れるのはやむを得ないことであつた。

八、立教学院にとつての元田

元田は、その後も立教大学長を務めたが、一九三三年、日本聖公会東京教区監督に就任するため、学長を辞任した。

日本人で聖公会の監督となつたのは、元田が初めてであり、それまでの功績が内外に認められた結果であつた。

だが中学校長に続き、大学長も辞任することで、元田と立教学院との関わりは、公式には消滅することになつた。その後一九二八年四月、大阪で監督在職のまま死去した。

元田は、立教中学校や大学の、校長や学長といった立教学院の主要ポストを歴任してはいるが、学院のトップには就任したことはない。さらにその後半は、聖公会やキリスト教界、教育界などで、要職を占めることが多くなり、立教との関わりは次第に希薄なものとなつていった。

こうした意味では、元田の立教中学校と大学との関わりは、創立者ではなく、あくまでも学校が出来てから就任した教員の一人にすぎないと見ることもできる。ミッション・スクールを創立した外国人の宣教師や、新島襄などとは性格が異なることは確かだ。

だが一方では、中学校と大学の立ち上げに直接の責任

者として携わつたことは見逃してはならない。

元田の死後、立教中学校の同窓会では、その名を冠した奨学金の募集を計画したが、その趣意書で、元田の役割を次のように総括している。

先生の御精神が当時の中学校に如何に自由な温い校風を醸成し、今日の立教スピリットを形成する事に役立ったかは、その頃在学せられた諸兄の等しく認められるところと存じます。元田先生こそ立教スピリットの産みの親であると申しても過言ではあるまいか⁽¹¹⁾

つまり、元田が立教中学校の「校風」や「スピリット」の「産みの親」と位置づけている。だが、その中身について、具体的に触れているわけではない上に、奨学金自体もその後どうなつたのかわかつていない。

もちろん、元田は表に出るような教育以外にも、学生や生徒の身の上に非常に心を配っていたことは確かだ。先に触れた前島潔は次のように述べている。

一度先生に触れた者に対しては家庭の事情まで呑込まれて、事にふれ折につけて綿密な注意と処世の道を教へられたやうである。大学部や神学校の学生達で先生の引立周旋によつて、就職し、洋行し、結婚した人が尠くなくない⁽¹²⁾

元田は、自らも青少年時代に苦勞を重ねたからか、教え

子の身の振り方には、特に気を配っていたようだ。元田の引き立てで、留学や就職を果たした場合も少なくなかったとされている。確かに進学や就職の斡旋は、当該の人物からは多くの感謝と尊敬を勝ち得るが、薫陶を受けるというようなことは、次元の違う話である。

元田が創設した立教学校ミッションの最初のメンバーの一人として、その薫陶を受けた若月麻須美は、元田が立教に果たした役割について次のように総括している。

例へば同志社といへば新島襄先生の徳望によりて成り、青山学院といへば本多庸一先生の度量によりて立ちしが、我立教学院に於てはかかる一人者といふものなく、学院の改革若くは信仰の覚醒などが、常に学生によりて成された¹⁰⁰

つまり、元田は、自らがカリスマ的な魅力を持つというよりは、学生それぞれが動きやすい雰囲気を作っていたというところに特質があったと捉えている。つまり、気配りのできるバランスのとれた人物であったといえる。こうしたところに、学校の指導者としての元田の特性が現れていると言えよう。別の表現をすれば、立教という学校に特定のカリスマ的指導者が出にくいという風土、伝統を形作ったということができらるだろう。

おわりに

本稿では、元田作之進の行動を立教学院、特に立教中学校との関わりを中心に見てきた。

当初、アメリカへ留学し、学問を身につけることで「ひとかど」の人物となることをめざしていた元田は、米国聖公会の宣教師テイングと出会うことで、キリスト教に入信し、さらには聖職者として生きていくことを選択する。

アメリカ留学からの帰国後、立教学校に赴任した元田は、チャブレンとして学内におけるキリスト教活動の復興に努めるとともに、YMCAなど聖公会以外でのプロテストメント界でも活発に活動することで、次第に日本における聖公会を代表する人物としての地位を確固たるものとしていった。

また、それまで必ずしも円滑ではなかった米国聖公会ミッションとの関係も修復することで、彼らからの信頼も勝ち得た。これが、元田の中学校認可や訓令十二号問題などへの対処で、立教が比較的円滑に事態を乗り切った要因の一つであったことはまちがいないだろう。こうした行動はキリスト教教育の妥協として、純理論的な立場から見れば、評価が低くなりがちなのは確かだ。

だが、元田らは、キリスト教学校の使命を、できるだけ

学校の門戸を広げることで、結果としてキリスト教の伝道や感化を広めるということに求めた。

本稿で見たように、実はこのような姿勢は、元田が特異であったわけではなく、当時の他のキリスト教学校の日本人指導者の間では、ある程度共通した考え方だった。つまり、一個のキリスト者としてではなく、立教という学校の責任者のひとりとして、現実社会との格闘する中で生み出されてきたものであった。

結果として、訓令十二号問題で他のキリスト教学校と対処が異なつたのは、ミッションとの関係が大きく影響していた。立教の場合、ミッションとの関係が他教派より良好だったことが大きな特徴だったが、それも元田の台湾協会学校幹事就任でも示されたように、必ずしも安定的なものではなく、時期によって変化していたことにも注意する必要があるだろう。また、学校内部に対する影響力も時期によって変化していたことも明らかだ。

その意味で、今回主に取り上げた立教中学校だけではなく、立教大学の創立、移転、昇格といった一連の動きに元田がどのような役割を果たしたのかを検討していくことは重要であり、今後の大きな課題となるだろう。

註

- (1) 寺崎昌男「立教人物誌…元田作之進(一)…誕生から受洗・留学まで」『立教学院史研究』六号 二〇〇八年。
- (2) ゼー、デー、デビス著、村田勤、松浦政泰訳『新島襄先生之伝』(福音社 一八九一年)。
- (3) 高木壬太郎編『本多庸一先生遺稿』(日本基督教興文協会 一九一八年)、岡田哲蔵『本多庸一伝』(日独書院 一九三五年)。
- (4) 井深樞之助とその時代刊行委員会編『井深樞之助とその時代(全三巻)』(明治学院 一九六九—一九七一年)。
- (5) 武田清子『土着と背教』(新教出版社 一九六七年) 七—一四頁。
- (6) 西原廉太「元田作之進と天皇制国家」老川慶喜、前田一男編著『ミッション・スクールと戦争』(東信堂 二〇〇八年)。
- (7) 大江満「立教学院初代総理アーサー・ロイド・教育と伝道と異端嫌疑」『立教学院史研究』(四号 二〇〇六年) など。
- (8) 拙稿「ミッション・スクールの歴史と特質」『大学時報』三五六号 二〇一四年。
- (9) 杉浦貞二郎「淋かりし元田監督」『築地の園』二九二号 一九二八年。
- (10) 高瀬恒徳「良山 元田作之進先生」『立教』一四号 一九五九年。
- (11) 松下ミツ「元田作之進を偲んで」『ニューエイジ』一一巻一一号 一九五九年。
- (12) 前掲「良山 元田作之進先生」。
- (13) 高瀬恒徳「故元田監督の事ども(一)」『東京教区時報』六六号 一九三七年。
- (14) 「新人物(三十四) 元田作之進」『人民』一九〇二年二月九日。
- (15) 高橋鉄太郎『当面の人物 フースビー』(フースビー社 一九一三

- 年)七六頁。
- (16) 若月麻須美「元田先生に就て」『築地の園』二九二号 一九二八年。
 (17) 前掲「元田作之進を偲んで」。
- (18) 前掲「新人物(三十四)元田作之進」。
- (19) 「故元田監督の葬式」『基督教週報』五六卷八号 一九二八年。
 (20) 倉富勇三郎日記研究会編『倉富勇三郎日記』(第一卷～三卷)(国書刊行会 二〇一〇～二〇一五年)。
- (21) 立教大学立教学院史資料センター編『The Spirit of Missions 立教関係記事集成 第四卷』(学校法人立教学院 二〇一三年)二四一頁。
 (22) 「教会月旦 得意時代の元田作之進」『読売新聞』一九二五年一月二七日。
- (23) 「初代邦人監督 良山元田作之進伝 第四章 宗教家として」『聖公会新聞』一九四一年六月。
- (24) 元田作之進「故チング氏と予の関係」『基督教週報』五六卷八号 一九二八年。
- (25) 立教大学立教学院史資料センター編『The Spirit of Missions 立教関係記事資料集成 第一卷』(学校法人立教学院 二〇〇九年)四二六頁。
- (26) 奈良常五郎『日本YMCA史』(日本YMCA同盟 一九五九年)一五〇頁。
- (27) 前掲『本多庸一伝』一二五～一二八頁。
- (28) 前掲『本多庸一伝』三九八頁。
- (29) この時点では、中学校として政府の認可は受けていない。当時は居留地内にあるので、必ずしも政府の認可は必要なかったものと考えられる。
- (30) 元田作之進「過去の経験をたどりて」『築地の園』二八四号 一九二六年。
- (31) 立教大学立教学院史資料センター編『The Spirit of Missions 立教関係記事集成 第二卷』(学校法人立教学院 二〇一〇年)二九二頁。
 (32) 立教学院八十五年史編纂委員編『立教学院八十五年史』(学校法人立教学院事務局 一九六〇年)一六三頁。
- (33) 前掲「立教学院初代総理アーサー・ロイド」。
- (34) 立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史 第一卷』(学校法人立教学院 一九九六年)五四五頁。
- (35) 同右。
- (36) 中村敏『日本キリスト教宣教史』(いのちのことば社 二〇一三年)二〇六～二〇八頁、「合同基督教大学設立計画之次第概要」(青山学院資料センター所蔵)、大西晴樹『キリスト教学校教育史史話』(教文館 二〇一五年)一二四～一二六頁。
- (37) 前掲『立教学院百二十五年史 第一卷』五四三頁。
- (38) 前掲『立教学院百二十五年史 第一卷』五四五頁。
- (39) 鈴木範久「立教Yの誕生」『立教大学キリスト教青年会 創立115周年記念誌』(立教大学キリスト教青年会 二〇〇六年)。
- (40) 前掲『立教学院百二十五年史 第一卷』五四五頁。
- (41) 前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』(聖公会出版社 一九三三年)三九頁。
- (42) 前掲『立教学院百二十五年史 第一卷』五四三頁。
- (43) 前掲『立教学院百二十五年史 第一卷』五四七頁。
- (44) 前掲『The Spirit of Missions 立教関係記事集成 第二卷』三二八頁。
- (45) 「牧師報告」『築地の園』一号 一八九八年。
- (46) 「園の昨今」『築地の園』四号 一八九八年。

- (47) 前掲『築地の園』一号。
- (48) 前掲「立教学院初代総理アーサー・ロイド」。
- (49) 「教界評論禁止」『東京朝日新聞』一九〇〇年一月二六日。
- (50) 稲垣陽一郎『ジョン・マキム』（日本聖公会北関東教区教育部一九四九年）三七頁。
- (51) 同右。
- (52) 久保田富次郎「故鈴木教授と私及び立教学院」鈴木一先生記念出版委員編『鈴木一先生日記及書簡』（鈴木一先生記念出版委員一九三六年）。
- (53) 立教大学立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』（立教大学二〇〇八年）四五～四八頁。
- (54) 前掲「故鈴木教授と私及び立教学院」。
- (55) 前掲『The Spirit of Missions 立教関係記事集成 第二巻』一〇九頁。
- (56) 谷川穰「教育・教化政策と宗教」『岩波講座 日本歴史 一五巻 近現代1』（岩波書店 二〇一四年）。
- (57) 前掲『本多庸一伝』一〇二頁。
- (58) 同右。
- (59) 本多庸一「基督教主義倫理科教授法的一端」『同志教育』二号 一八九三年（弘前学院編『本多庸一資料 二』（弘前学院出版会 二〇一一年）。
- (60) ジョン・マキム「基督教主義の教育」『同志教育』三巻二号 一八九六年八月。
- (61) 前掲『立教学院百二十五年史 第一巻』三八頁。
- (62) 前掲『立教学院百二十五年史 第一巻』四八頁。
- (63) 前掲『立教学院百二十五年史 第一巻』三八頁。
- (64) 小川原正道『明治の政治家と信仰』（吉川弘文館 二〇一三年）一三四～一四一頁。
- (65) 「立教尋常中学校の認可と校内宗教的生命」『築地の園』二号 一八九八年。
- (66) 同右。
- (67) 同右。
- (68) 同右。
- (69) 「園の昨今」『築地の園』二号 一八九八年。
- (70) 前掲「立教学院初代総理アーサー・ロイド」。
- (71) 佐々木竜太「明治中期における私立中学校認可をめぐるキリスト教主義学校の対応に関する研究」『青山学院大学教育人間科学部紀要』六号 二〇一五年。
- (72) 同右。
- (73) 上野直蔵編『同志社百年史 通史編1』（学校法人同志社 九年）四四〇頁。
- (74) 前掲「明治中期における私立中学校認可をめぐるキリスト教主義学校への対応に関する研究」。
- (75) 井深梶之助「所感」『同志教育』三巻二号 一八九六年。
- (76) 前掲「明治中期における私立中学校認可をめぐるキリスト教主義学校の対応に関する研究」。
- (77) 明治学院百五十年史編集委員会編『明治学院百五十年史』（学校法人明治学院 二〇一三年）一三七、一三八頁。
- (78) 左乙女は退職後も立教を訪れたり、関連行事に参加していたことが確認できるので、絶縁状態となったわけではない。ただ、当時教員だった久保田富次郎がこれに際して反対運動を展開したとしているように（前掲「故鈴木教授と私及び立教学院」）、必ずしも円満な退職と

いうわけでもなかったようだ。

- (79) 前掲『The Spirit of Missions 立教関係記事集成 第二巻』四四〇頁。
- (80) 中島耕二『近代日本の外交と宣教師』（吉川弘文館 二〇二二年）一六三～一六六頁。
- (81) キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編『キリスト教学校教育同盟百年史』（キリスト教学校教育同盟 二〇二二年）三六、三七頁。
- (82) 前掲『立教学院百二十五年史 第一巻』三九頁。
- (83) 前掲『The Spirit of Missions 立教関係記事集成 第二巻』三七五、三七六頁。
- (84) 前掲『明治学院百五十年史』一四二頁。
- (85) 大江満「明治後期キリスト教主義学校の文部省訓令一二号問題への対応」江島尚俊、三浦周、松野智章編『近代日本の大学と宗教』（法蔵館 二〇一四年）。
- (86) 立教中学校百年史編纂委員会編『立教中学校百年史』（立教中学校 一九九八年）六九頁。
- (87) 元田作之進「過去の経験をたどって」『築地の園』二八四号 一九二六年。
- (88) 「園の昨今」『築地の園』一五号 一八九九年。
- (89) 「園の昨今」『築地の園』二九号 一九〇一年。
- (90) 菅田吉『立教学院設立沿革誌』（立教学院八十年史編纂委員 一九五四年）八一頁。
- (91) 前掲「立教学院初代総理アーサー・ロイド」。
- (92) 「園の個人」『築地の園』四八号 一九〇三年。
- (93) 前掲「故鈴木教授と私及び立教学院」。
- (94) 同右。
- (95) 六角塔人「元田先生の横顔」『いしずえ別報』（創刊号 一九三八年）。本荘の希望で、名称は教務主任となったが、実質的には教頭であった。（本荘掬水「元田良山先生に就いて」『立教学院学報』五巻二・三号 一九三七年）。
- (96) 前掲「元田良山先生に就いて」。
- (97) 前掲『立教学院設立沿革誌』六七頁。
- (98) 前島潔「元田先生の追憶」『立教学院学報』五巻二・三号 一九三七年。
- (99) 前掲「元田先生の横顔」。
- (100) 前掲「故鈴木教授と私及び立教学院」。
- (101) 「元田作之進先生記念奨学資金募集趣意書」『立教学院学報』五巻二・三号。
- (102) 前掲「元田先生の追憶」。
- (103) 若月麻須美「元田先生に就て」『築地の園』二九二号 一九二八年。